

バガン遺跡壁画 再現

バガン遺跡壁画を再現するにあたり、ミャンマー・バガン遺跡を訪問して目視調査・高精細撮影・3D計測等を行いました。再現の対象となった壁画はミンカバー・グービャウツデー寺院の中にある『ダンス』『ミュージック』です。壁画制作工程は大きく分けて「撮影調査・画像編集」「壁画下地制作」「絵画層制作」「印刷」「貼り込み」「手彩色」に分かれます。

撮影調査・画像編集

撮影を行った窟内は狭く、撮影に十分なスペースが確保できないため、壁画を部分ごとに撮影することになりました。現地で高精細撮影したものを帰国後につなぎ合わせて一つの画像に統合します。この時一枚一枚の部分画像の明るさや色味を微調整して全体感を整えました。画像の色を調節する際には、現地で制作した色合せカードを使用しました。



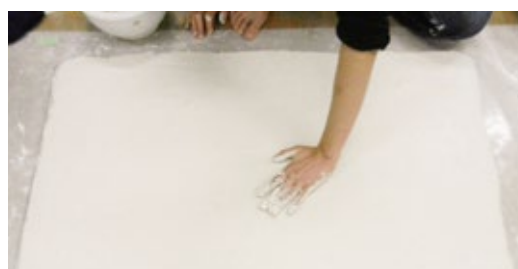
現地での調査風景



コンピューター上で画像をつなぎ合わせて一つに統合する

壁画下地制作

バガン壁画の土台には、ある程度の強度を持ちながらも、軽量で加工に便利な石粉粘土を使用することにしました。まず鉄の棒を用いて粘土を平たく伸ばし板状にします。裏面には寒冷紗を貼り、それをさらに粘土で埋め込んでいきます。こうすることで寒冷紗が壁画の芯材になり割れを防ぐ効果があります。厚みが整ったら、四辺をカットして裏表を返しながらかん土板が反らないように乾燥させました。



壁画の土台となる石壁を制作する

絵画層制作

壁画表面の絵画層になる部分には和紙を用いました。和紙は柔軟性と強靭さを兼ね備えており、凹凸面に貼り込む際、とても良く馴染んでくれます。まず和紙に原寸大にプリントした画像を用いて主要な線をトレースしました。その線が消えない程度に和紙全体に白色顔料とスポンジ等で壁画表面の質感を作っていきます。これがクローンを触った時の質感になります。クローンは触れる文化財というコンセプトを持って制作しているため、表面の質感再現はとても重要です。凹凸ができればその上から、先ほどのトレース線を元に、描かれた時のタッチ（筆跡）を盛り上げていきました。バガン壁画はこのような絵具の筆跡による盛り上がりがよく残っています。



和紙全体にスポンジ等を使用して壁画表面の質感を作っていく



凹凸ができればトレース線を元に、描かれた時のタッチ（筆跡）を盛り上げていく

印刷

トレースした場所の筆跡に合うように、何度も位置を確認しながら、和紙に本番の印刷をかけました。凹凸をつけた紙は破れやすいので、印刷には細心の注意を払います。



トレースした場所にあわせ、位置を確認しながら印刷をかける

貼り込み

印刷した和紙を、粘土

手彩色

貼り込みが終わり壁画の表面が乾燥したら、手彩色の工程に入ります。印刷の画像は実際の絵に比べてのっぺりとして平面的な印象になります。そこに実際と同じ絵具を用いて、人の手によって彩色を入れることで絵は迫力と奥行きを取り戻します。さらに壁画の縁を割って形を整え、絵画層の欠損部分に彫りや叩きを入れ凹凸をつけることで剥落した風合いを表現しました。



最後に人の手によって彩色を入れることで、絵は迫力と奥行きを取り戻す